野木小学校
同窓会報
第12号
平成10年12月
野木小学校同窓会編集部

ご挨拶

第32回卒（昭和16年）堤
同窓会長　田中栄一

同窓会の皆様には、益々御健勝にてご精励のこととお慶び申し上げます。

今年は春以来、異常気象が続き、梅雨明け宣言もないまま秋を迎えました。この野木の里にもあちこちにコスモスが咲き、通学路にはススキがゆらゆらと行列をつくって揺れています。

本同窓会報は共にこの道を通った野木小学校の同窓会の会員の方々にお届けしております。会報が、同窓会お一人お一人にとって情報交換や励まし合いによって、尚一層の絆を結ばれ、それぞれの生活のビタミン剤となれば幸せと存じます。

幼い頃、共に学んだ懐しい校舎、道草をしながらの登下校、友だちの笑い顔、先生のやさしかったり、怖かったりの顔。いくつになっても、地元におりります私にとっては小学校の前を通るたび、または、田畑の匂いをかぐたび、その頃の情景がまざまざとよみがえって来て、感慨ひとしおのものがあります。想い出は、年月を重ねるにつれて懐しく、心につのり、また、刻まれてゆくものであるとつくづくと感ずる今日このごろでございます。自分の母校というものは自分の人生の出発点でもあり、なにか苦しい事や、楽しい事があった時、その出発点に戻り、生涯忘れる事のできない、教えの場であります。又、この様な母校があるという事は、私達にとって非常な喜びであります。今それぞれの土地でご活躍されて居られるのも自分自身を育ててくれた母校があっての事で、歳を重ねる程に同窓生である誇りと喜びとともに強い想いとなって参ります。

この想いを伝えるべく、今年も故郷の唯一の会報として、第十二号の同窓会報を発行させて頂きました。発行にあたりご投稿を頂き、快くご協力賜りました方々に厚くお礼申し上げます。又編集にさいし、本会役員始め、編集委員の方、小学校の方々の御尽力に心からお礼申し上げます。

最後に会員皆々様のご健勝とご多幸を念じ、我ら母校、野木小学校の発展をお祈り致します。

明日への一歩

学校長　岩本守博

慌しかった収穫の名残りを見せつつ、はや野木の里にも晩秋の爽やかな風が渡るようになりました。会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

野木小に寄せて頂いてからようやく三年目を終えようとしているのですが、保護者の皆様や地域の皆様の一方ならぬご支援、ご指導を賜りまして、本校に勤めさせて頂く有難さを、じわっと感じさせて頂いております。

最近になって子供たちがよく校長室を訪れてくれるようになりました。初めのうちは何もかもめずらしがって、大はしゃぎの場になっていたのですが、この頃はちょっとしたおしゃべりや絵をかいたりすることが多くなってきました。私の息子たちが使っていた読み物の本を並べてみると、待っていた一年の子がとび込んできて読み合っていました。どちらかというと、訪問客は女の子のほうが多いのですが、どの子の瞳もきれいに輝いています。百歳を己に過ぎたきんさんぎんさんでさえ、すばらしい輝きを持っておられますが、喜々として動き回るこの子たちもお二人のようにと願わざるを得ません。

日本は物が豊かになった反面心が貧しくなってきたと、ことあるごとに言われます。そして、そのことをあたかも証明するかのような事件が、次々と大人社会にも子供社会にも引き起こされています。嘆かわしい世の中になったものだと思わずにはいられないのですが、ある時、ちょっとしたきっかけで、ある学習会に参加する機会を得ました。「人を育てる心」を題目にして講義がなされたのですが、そこで先生は次のようなことを言われました。「人間は人間に育てられて人間になる。我々は人間を育てているだろうか。」…私はこの言葉を聞いた時、背にビクッと走るものを感じました。そして、次の言葉が重くのしかかってきました。「我々には自分で自分を育てあげる義務がある。」…自己啓発という言葉は何度も聞いたことはありますが、この時ほど厳しさを感じることはありませんでした。

私自身が子供たちと共に輝き続けること、そして、自分を育てることに今からなお努力していきたいと考えております。今後とも何卒ご支援・ご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

地名の由来を尋ねて

第42回卒（昭和26年）杉山
町議会議員 高木貞夫

苗字の多くは、私たちの先祖が長く住んでいた場所を示している。苗字の源は地名であり、地名の大半は自然の地形と地質を表現したものである。

杉山区内には、幸いにも平地の地名が百十余、山地の地名が七十余記録として残されている。

私が郷土の地名に興味を持ち、独学で調査と研究を始めてから、すでに十年の歳月が経過した。最近になって、杉山区内の地名の由来について、その総てを解明し終えたところである。

そこで、野木地区の大字名の由来について、少しばかり考察してみようと思う。

杉山

圃場整備工事に際し、地中から神代杉の根が広範囲に出土したことから証明される通り、古い時代には平地に杉の大木が林立していたことによる命名であろう。

堤

ツツミの語は堤防や沼地の意であり、井根山から杉山境に至り、釜ヶ崎にかけての広い低地には沼地を示す小字名が点在している。

これは、大川が湾入して沼地状を呈していたことに由来するものであろう。

加福六（上兼田）

カブロク・カブラクの語には、次の意味がある。

平地や川原に向って脹んでいる地、山が崩壊して出現した地。また、カブラギ（鏑木）で神の宿る木が生えている地を示している。

何れの解釈も、この土地の特徴を表わしており、伝説などを参考に判断しなければならないと考える。

兼田（下兼田）

平安時代の末期、若狭国の武家人の中に、包枝太郎頼時の名があり、カネエダがカネダに変化したものであろう。

カネエダの語には、川辺に添う直線状の地、川辺に添う分村（枝村）の地の意味がある。

この地は、山と河原に挟まれた細長い土地であったか、または武生村の分村であったと考えられる。

武生（ムシュウ）

平安時代の末期、若狭国の武家人の中に、虫生五郎頼時の名があり、虫尾とも表記されている。

ムシュウはムシウの変化したものであり、次の解釈が成り立つであろう。

苧麻（カラムシ・チョマ）が自生していたか、植栽されていた地、桑の木が自生していたか、植栽されており養蚕に関係のある地、泥土が堆積する肥沃な地。

この地は武生川と大川の合流による泥土が堆積する地なのか、織物に関係のある地なのかは、伝説などによって判断すべきであろう。

玉置（タマキ）

奈良時代から玉置郷の名が見られ、田巻または手巻と表記されており、江戸時代には玉木とも表記された。

玉置村は、もと日笠地籍の船塚の近くにあったと伝えられており、玉置駅家跡とも併せて考えると、次の解釈が成り立つであろう。

御霊を祭祀する地、柵を廻らして馬を放牧する地、山や川を半円状に取り巻く地、集落の間にある無住の草地。

私としては、日笠の地にあって、御霊を祭祀していた栄光ある集落と解したいのだが、地元の子孫としては、果してどの様に解釈されるであろうか。

旧職員からの便り

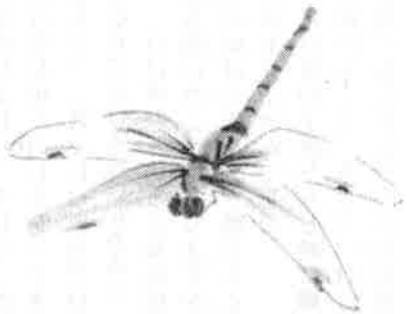
ぬくもり

畠中美智恵

外から帰ってきますと、膨らんだ封筒が届いております。差出人は、"野木小同窓会"からでした。懐しさと嬉しさで、心臓が高なる思いでした。カバンも下ろさず、その場で一気に封を開けました。なんと、同窓会報の原稿依頼の件でした。私にとって、文を書くことは大の苦手で随分悩みましたが、長い間、お世話になったことゆえ、恥も顧みずペンをとった次第です。

在職中は、大変お世話になりありがとうございました。

雄大な箱ヶ岳と野木の山のふもとに展開するすばらしい野木の里で、七年間もの長い間、本当に楽しく勤めさせていただいたことに感謝申し上げます。通勤距離が近い上に、田園に囲まれたのどかな環境



と温厚な地域の方々に恵まれ、ありがたく思っておりました。

思い返せば、着任の日、校舎に入り、感心したことが三つあります。一つ目は、校舎がとてもきれいで、明るく感じたことです。ところどころに花が飾られ、私の心を魅きつけました。子ども達に、気づく心と感性を養う上でいい試みだなあと思いました。私も、花をさわることが好きで、勝手気ままに飾れるのが楽しみでもありました。二つ目は、お掃除の時間、どの子も黙々とやっている姿に感銘を受けました。学校がきれいなことが、ここでうなずけられた訳です。一日目にして、野木の子ども達に好感が持てました。三つ目は、集団行動が規律よくできるなあということです。これは、ひとえに子ども達が素直であるということだと思います。以上の様な感想を持ちつつ、これから、純朴な野木の子ども達と一緒に生活できることを嬉しく思ったものです。

また、地域の方々の教育の情熱と学校への協力が大きかったことも忘れてはなりません。平成九年度の研究発表会は、地域の方の協力なくしては、到底成果を収めることはできなかったと思います。

「地域に根ざした教材開発の工夫」を視点におき、実践できたのも、野木地区だからこそという思いを強く持っております。二年生が実践に取り組んだ"米作り"体験学習は、まさにこの地域の特性を生かしたものでした。旧校庭に田んぼを作っての米作り―。多数の方のご協力を得て、子ども達と一緒に楽しく体験活動ができたことは、私の教師生活の中で、生涯忘れ得ぬこととなるでしょう…。秋祭りでの子ども達の生き生きした顔が、今でもはっきりと浮かんでまいります。

転任して、改めて、野木地区の皆々様の人情の深さ、やさしさ、ぬくもりを、そしてまた、職場の皆様との心の交流も深かったことを痛感しております。

今後も、子ども達がよき環境で、日毎にすばらしい成長を続けられることをお祈り致します。

最後になりましたが、同窓会、並びに野木小学校の益々のご発展と、更には地区の皆々様のご多幸を祈願して、駄文を終えさせていただきます。

ミニアルバム

堤　内藤譲治

手元に一冊のミニアルバムがある。私は写真やビデオで撮影されることは好きではないが、撮影するのは好きである。教師になってからは特に、子どもたちの活動を記録することが趣味となった。ただテープや写真の整理が下手なため所在がわからなくなっているものも随分ある。手元のミニアルバムも偶然、引き出しの底から出てきたものだ。中には十年前に担任していた子どもたちの写真が数枚ある。

「野菜の人形」

子どもたちが、大根やかぶらなどで作った人形を手にして笑っている。当時は上中町の子供会では、「あすなろ大会」を開催し一年間の「あすなろ活動」を発表しあっていた。この年は、野木小学校を会場として開催された。この写真は、五年生がアトラクションとして野菜人形劇を発表した後に撮ったものだ。野木子供会（小学校）の「あすなろ活動」は活発でテレビでも放送された。そのころ瓜生小学校に勤務していた私は、「野木の子はよく働く。」という声をよく聞いていた。野木小学校へ赴任してその話が本当だと感じた。グランド造成により、プール横の畑はなくなったが、校舎横の田を貸していただいて地域の方々の協力を得ながら「あすなろ活動」を続けていた。

「ユニフォーム」

写真には、胸に「Ｎｏｇｉ」と書かれたユニフォームを着た男の子が十一人並んでいる。場所は、市姫グランド。町子連ソフトボール大会の時のものだろう。当時は、居関久夫・居関正幸両氏が、熱心に指導をしておられた。おかげで大会ではいつも上位の成績だった。また、厳しさと優しさのある練習で、野球やソフトボールの技術はもちろん、チームワークの大切さや人間性までをも、子どもたちは学んでいたように思う。

ソフトボールと言えば、夏休みの集落対抗の大会もあった。初めてこの大会を見たときには、なぜか妙に感動したように覚えている。

「山越えの海水浴」

疲れ切った左近先生のまわりを子どもたちが笑顔で歩いている。「親子民泊」の時の写真だ。前回も親子で食見で「親子民泊」をしていたのだが、学年委員の正木重雄さんの「親子で汗をかくことが少なくなったから宮川から山越えをしよう」という提案が保護者会で支持されたのだ。正木氏はこのあと、鎌をもって現場を下見して子どもたちが安全に通れるようにと枝や生い茂る草を刈り払って下さっていたのだ。そして当日には、アイスクリームの詰まった箱を背負って山を登られた。「親子での山越えはいいことだけど大変だ」としか考えていなかった私は、この姿に深く感謝し、また自分のいい加減さを反省したことを覚えている。波打ち際で撮った写真には、親子のうれしそうな顔が写っている。

「いただきます」

美しい壁画のランチルームで、巻きずしを前にして合掌している。これは善四郎さん

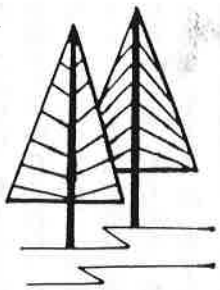
に指導していただいて親子ですし作りをした日の一コマである。当時は「福ちゃんせんべい」の販売が行われるなど米消費拡大運動が推進されていた。このすし作りもそんな補助事業の一つとして行ったものである。普段はあまり食事の準備をしないであろう子どもたちも、友だちや母親と一緒だということで喜々としてすし作りに取り組んでいたように思う。

五年間、野木小学校で勤務して今になって思い出すのは、授業以外の活動が多い。もちろん理科で水素のシャボン玉を作ったり、小数の計算をみんなで考えたりしたというようなことを思い出すが、具体的に思い浮かぶ場面は少ない。

中教審や教課審の答申によると、「心の教育」のために『地域で子育てを支援しよう』とか、『違年齢集団の中で子どもたちに豊かで多彩な体験の機会を与えよう』ということが提唱されている。しかし、手元の数枚の写真を見ていると当時から野木小学校では、地域の物心両面の支援・協力のもとに、このような教育が推進されていたのだと思う。残念ながら諸般の事情で、行われなくなったものもあるが、地域の教育に対する理解と関心は変わっていないと思う。またいつか、野木小学校で勤務できたらと願っている。

ふるさと野木

岡本瑞英



野木の里――私にとってふるさとの一つです。上中に嫁いでから、野木小学校にまずお世話になりました。その時に生まれた息子たちも今は、高校生です。

ランチルームにある壁画は、松宮昂校長先生の作品ですが、下の方には、その当時の在校生と職員が一本ずつ描いた花が見られます。いつまでも良い思い出です。

上中中学校に転任し、九年後に再び野木小に。それからあっという間の五年間でしたが、実に充実した日々でした。

毎年、夏になると思い出されるのが「ふるさと音頭」の発表会です。暑い体育館のあちこちに氷柱が置かれる中、歌手前田卓司さんのバックコーラスを六年生が務めました。夏休みを目前にしての依頼で十分な練習とはいえませんが、子どもたちは堂々とさわやかな歌声を響かせてくれました。野木の四季折々の情景を軽快なメロディーで歌い上げている「好きです。ふるさと」は、好きな曲の一つです。野木は私にとってもふるさとなのです。

音楽を通して、たくさんの思い出を作れたことを幸せに思っています。特に、町音楽会に向けて子どもたちと心を一つにして創り上げてきた数々の音楽は忘れることがありません。リコーダーと共に歌った「ハンメルンの笛吹き」、オーケストラみたいだと誉められた「新世界第四楽章」の合奏、手話コーラス「友だちになった日」…。一年生を初めて担任させていただき楽しかった日々。「六年生を送る会」で一年生が「輪になっておどろう」を歌って踊り、「きらきらぼし」のハンドベル演奏ができたことなど、思い出は尽きません。

野木小学校でのこれらの貴重な経験は、私の教職生活の中で『最高の宝物』となっています。

野木小学校の児童数が年々減少の傾向にあることは残念なことですが、少人数でも明るく頑張っていってくれるものと信じております。

またいつか野木小学校の子どもたちと一緒に音楽会に出場できることを夢見ております。

会員からの便り

六十年前の小学校を偲びて

第28回卒（昭和12年）
玉置　奥本早苗

私が野木小学校を卒業したのは昭和十二年三月、今から半世紀前（六十年前）でした。

六十年前の野木小学校は木造校舎で、校庭をL字型に囲むように建っていました。校門の前に小川が流れていて、大理石の橋がかかっていました。校門の両側に太い八重桜の木が二・三本あって、春になるときれいな花を咲かせ、新入生の入学をあたかも祝福するようでした。又校庭の東側には巨大なぽぷらの木が二・三本あり、天を突くような感じでした。又西側にはやなぎの大木が生えていました。枝もたわわに垂れ下っていました。修身という教科書の中に小野道風の、やなぎの枝にかえるが飛びつき飛びつき繰り返し三度目位に飛びついたという話がありました。小さな名もない動物が可能性を求めくり返し挑戦するとやがて成功するという話でした。当時はそう物事を真剣には考えてはいませんでした。柳の小枝でこの木の枝かなと眺めていました。

校門を入ると校庭の東側に奉安庫があって、両側に赤さ

びた機雷が二個すえてありました。奉安庫の回りには松の木をはじめ色々な木が植えてあって、暑い夏の日などにはかっこうのよい涼み場所でした。奉安庫には今上天皇陛下、皇后様の御写真や教育勅語などが祭られてあると聞きました。

私たちは、校門を入ると先ず奉安庫に向かって深々と一礼して昇降口に向かい、下足を下駄箱に入れて校舎の中に入りました。昇降口は雨天体操場の前にありました。雨天体操場(講堂)は二階建でした。二階には上った事はなかったのですが、高学年の工作室だと言うことでした。講堂には太い柱が二・三本あったような記憶があります。講堂を通って教室に入ります。

当時は、四年生まで複式学級でした。複式学級というのは、二学年同じ教室で勉強を習う仕組です。一・二年生は今は亡くなられた細野トシ子先生でした(西津町出身)。三・四年は奥本スガ先生に教わりました。五・六年は吉村文男先生にお習いしたように思います。六年間長いようで短く夢のように過ぎ色々と懐かしい思い出が数多くあったと思いますが、取り上げるような思い出が浮かんでこないのが淋しい限りです。年中行事には春秋の遠足、秋の運動会、冬の学芸会がありました。放課後の課外体操として男女共ドッジボールがありました。晴天の日は校庭でドッジボールの練習でした。五年生の時、郡市の大会で野木小学校が優勝した記憶があります。

当時の教科に修身という教科があって、この教科は校長先生にお習いしました。校長先生は田邊重一先生で、綱女の話や佐久間艇長、判信友、小野道風、二ノ宮金次郎先生などのお話を習いました。五・六年の歴史は教頭先生だった船木益五郎先生でした。時々講談社の偉人や歴史上の人物の本を読んでもらい、耳を澄まし聞き入った当時を偲んでいる今日此頃です。

私の思い出

第28回卒(昭和12年)
堤　田中　百合子

箱ヶ岳麓の静かな里に生まれ、堤分教場に入学した遠い遠い思い出、皆んながとても仲良しでした。又学芸会があると遅くまで一生懸命習い、女子は着物の袖に鈴を付けてシャンシャンと踊り、楽しかった思い出の鈴、今も大切にしています。三年生の時、学校で怪我をして休んだことがありました。西田先生が毎日家に来て傷の手当して下さいました。今でもその傷跡を見る度に、先生の優しかった思い出がうかびます。四年生になると本校でした。そして遠い道程であったしそれに冬になると雪が多くて、今は少ないですが当時は大変で、凍った時など「マント」に身を包み転びながら通った事など…本校に行き一番嬉しかったのは、上級生の綾野様や志ず枝様からお裁縫の針箱と針刺しを頂いたことでした。お裁縫に通っても大切に使っていました。学校から帰ると家の手伝いを皆んなよくした事と思いますが、私は「メモ」がして有り、明日は田植になると、苗代の田へ入り苗束を何百と品種別に数え、祖母に早く数える方法を習ったり、ともすれば泥の中にすわり皆んなに笑われて帰ったり、又稲や麦掛けなど手伝ったことを今でも覚えています。又、高学年になると、学校の実習田で、田植え、草取り、稲刈りと竹中先生に教わり、はしゃいで叱られたことをなつかしく思い出します。私はその頃体育が好きでした。昭和十三年十月六日に、郡の試合が小浜の雲浜小学校であり、陸上の部の走高飛びで一位になり、新聞に出ました。其の写真を先生が支那の戦地で戦っていた田中義雄叔父さんの慰問の手紙に入れてあったと嬉んで頂き、今は私の手に戻りました。そしてこの写真はバレーボール選手チームで野原先生がとてもきびしく、試合や練習によく頑張りました。バレーボールチームの友も卒業後逢ってない友や又亡くなられた友もいますが、何時までもお元気で居られます様にお祈りします。私はバレーボールを通じて今まで婦人会や老人会活動に活かされて懐しく楽しかった思い出の数々を忘れません。

今は亡き先生方を偲び見守って頂けるようにと毎日を感謝で暮らす日々です。

同窓会の皆々様の御健康と御多幸を心より御祈り申し上げます。

時代

第33回卒（昭和17年）
小浜市　上野安夫

諺に十年一昔と言います。小生在学当時の思い出は、五十数年前のことになるので、定かではありません。昔話の一端として思いの儘記します。

とにかく戦争時代でした。昭和十四年支那事変が起こり、昭和十六年大東亜戦争が始まる。軍国時代の真最中だったと思います。兵隊さんおくり、勤労奉仕等々勉強どころではありませんでした。高一・二年では担任の先生が留守がちで、自習又は教頭先生、校長先生が代わっての学習でした。学校名も国民学校と名称が変わったように記憶して居ります。何かに付けてお国の為ばかりでした。今だに忘れられないのは、満蒙開拓義勇軍の研修訓練に、遠敷郡各校下から二名で今富小学校へ杉山の田中正雄君と野木校から参加しました。

高二の時と思います。早川校長先生の折だったと思います。其の折は軍人の様に銃、背嚢、ゲートル（巻きゃはん）の服装でした。全員で五十五名でした。今は顔を覚えているのは二・三名です。他は解りません。色褪せた古写真ですが同封致します。前列の後の列は先生方です。年輩の方でしたら、先生の顔を知って居られるかも知れません。小生は、早川校長先生と西村先生二人が解るだけで、他の先生は解りません。西村先生は上竹原区で九十五才。今だに健在です。野木小学校にも二年程勤められたそうです。時折野木小学校前を自動車で通りますが、今は立派な校舎、運動場となり、今の生徒さん幸せだと思います。

最後に、野木小学校の益々の発展と同窓会皆々様の御多幸とご健康を祈念致します。私の趣味から二句詠じます。

目に浮かぶ
激動昭和の史を辿る

子の為に
軍靴履く世にしてならぬ

故郷の友情

第33回卒（昭和17年）
摂津市　北村政雄

昭和十二年に転校して八年間、野木国民学校で学びました。

終戦になり、二十一年に建築で自立しようと決心して、大阪へ上阪致し、以来修業を重ね現在に至る迄、只々無我夢中で一生懸命仕事に励み、友人ともお会いする事もなく年をとりました。いつも想い出されるのは、故郷の風景と気になる友人の安否です。

長い年月が過ぎれば尋ねるすべもなく、淋しい気持ちでした。平成六年仕事より帰宅すると、野木小学校時代の同級生の方より電話があり、第三十三期生の同級会を三月に芦原にて開催するので是非参加をと。昔と変わらぬ声と話し方、驚きと懐しさ、そして嬉しさが一緒になり、其の日の夜はねむれませんでした。

待ちに待った再会の日が来ました。全員バスにて来られるそうでした。小生は汽車で早くホテルに着きました。部屋に案内されましたが、同級生といっても卒業以来一度も会っていません。顔をおぼえてくれているだろうか、少し不安になりました。それではとロビーで待つことにしました。

まもなくバスが到着しました。しばらくして集団で入って来ました。誰が見つけてくれたのであろう、何とも言いようのない呼び声、胸があつくなるのを感じました。言葉を交わす内に感激して、後の事はよくおぼえていません。宴会もたけなわ、普段無口な小生ですが、アルコールが廻り少しは喋る様になりました。過ぎ去った永い年月の空間をうめるには余りにも短い一時でしたが、何の違和感もなく小学生時代のこと、そして近況、それぞれの家族の事について語り合いました。お互いに顔を見合わせ乍ら気付いた事は、昔と変わらぬやさしさでした。そしてなお、一層の親しみを感じました。

平成七年、五十年の空白を埋めてくれた友人に、もう一度会ってお礼を言いたく常々気にかけておりましたが、折しも一月十七日早朝、阪神大震災で神戸の得意先が被災に合われ、小生仕事がら日夜通して、大多忙の日々を送り続けておりました。暇を作って出かけようと思っておりました所、知人よりお世話になった弥寿雄様の訃報を知らされ愕然と致しました。早速に家

内とお参りに行きましたが、気持が重く故郷の景色も淋しく映りました。小生にとって生涯忘れる事の出来ない想い出をあたえて下さった桑原弥寿雄様に哀悼の意をささげ、言いつくせないお礼の気持ちで有りがとうを申し上げます。

若狭の神事祭禮の能

第38回卒（昭和22年）
上野木　武田欣司

私が仕事としている「能」は、若狭地方にも古くから伝わって来たものです。

能は室町期の頃より田楽・猿楽等から発展し、現在の能楽として大成しました。その時代時代により種々の変遷はありますが、若狭地方の能は神事の能として伝わって参りました。

父から伝え聞きました若狭の神事祭禮の能について述べたいと思います。

各地区の神社には、拝殿の前に能舞台があります。（神楽殿ではありません）橋掛り（はしがかり＝花道）が付いている舞台もあり、能を行う時に社務所より舞台へ橋掛りをかける神社もあります。

祭禮として行われる能は、農村では田、漁村では海、山村では山のそれぞれの神様への奉納を目的として行われた様ですが、ここでは農村での祭禮を申します。

春祭に行われる能は、田植えの終わった時期で稲作の豊作を祈願し、秋祭に行われる能は、豊作の感謝と来年への祈願で、本祭として盛大に営まれました。

一座の楽人は、毎年の舞台前（年末）に演能曲目数曲を決め、それを練習します。

能の配役には、シテ方（主役）、ワキ方、地謡方、ハヤシ方（笛・小鼓・大鼓・太鼓）、狂言方があります。私共能楽師は現在それぞれの役方が分業化され、専門職を勤めればよい事になっておりますが、祭禮能を演じる方々は、シテ方を演じた人が次の曲にはハヤシ方、狂言方と種々勤めねばなりませんでした。

普段は百姓の人達ですから、農閑期に練習し専門の師匠にも講習を受けねばならず、又装束の補修、道具を修理に出したり、面の彩色、欠落の修理等一人何役もこなさなければならない為、仲々大変だったとの事でした。

能は総合芸術なので、全員が息の合った、気合の入った舞台を演じる様に何回も練習を重ね本番を迎えるのです。それで以って奉納をし、直会（なおらい＝祭事が終って后供物、御酒を頂く宴会）をし、次の地区へ移動します。

次の地区へは、大八車で装束、道具を積み、運んだそうです。

一座に従事する人々は百姓という本職の外に、神様に奉納する舞台をつとめる事、村中の人々に観てもらう事、又勤めた後御神酒が頂ける事等に大きなよろこびを感じておられたのだろうと思います。

現在では三ヶ所程の神社で行われておりますが、それ以外の所では能の奉納は無くなっております。

今では拝殿前にある舞台が何の為にあるのかわからない人が多いのではないかと思いますが、かっては盛んに神事能が行われていたと云う事なのです。

現在でも若狭地方の神社には三十数ヶ所もの能舞台が残っております。

昔の人々が神社の舞台で舞う姿に思いを馳せる次第です。

「虎御前」の思い出

第43回卒（昭和27年）
枚方市　奥本健男

野木を離れて丁度四十年。同窓会や帰省時以外に、野木のことが話題になることはほとんどありませんでした。

先日、偶然店のテレビに若狭が映り、旧野木役場前の「虎御前」の岩の話が出、共通の思い出があることがわかりました。以降、懇意にさせてもらっています。

私にとって虎御前は、風の強い日や大雪の時、苦労して小学校に通う中間点にあり、息抜きの場所でした。役場前の岩と、川向かいの山からつきでた大きな岩で、大晦日には、それぞれ小さなしめ飾りと鏡餅を供える役割があり、真冬の川を渡っての飾り付けに苦労したことなど思い出しました。

淵をはさんで「虎御前」というのですから、おそらく悲恋伝説があったのでしょうが

詳細は解りません。ご存じの方に教えてもらいたいものです。

話し相手は、大阪ミナミの繁華街、千日前大劇南通り「天秤棒」の主人、三国さんがその人で、毎日黒門市場で鮮魚を仕入れて食べさせてくれる居酒屋の主人です。

彼のお父さんが役場横の駐在所に勤務しておられ、虎御前の岩が遊び場であり強く印象に残っていることや、その岩が上中駅前に置かれていたことなども話されました。

お父さんが若くして亡くなられたこともあって、小さな子供達をかかえて大阪に出られた母親の苦労が忘れられないし、自分のガンバリの原点とも三国さんは話されます。

最近の主人との話題は、昨年春以降の消費不足はあらゆるところに影響を及ぼし、ミナミの飲食業も同じで、「なんとかしてくれ」とか「税金を使って銀行やゼネコン支援は許せない」が専ら。

私の働く繊維関係の職場や取引先でも同様の声が聞かれます。繊維製造業の従業員数は昭和四十一年がピークで二百八十万人、現在では百八十万人、この不況の中でさらに減少と言われています。これに伴い日本各地の繊維地場産業の衰退が加速度的に進んでいます。

いざ必要なときに物がつくれない、技術もない状態に近づいているといえます。このことは農業についてもまったく同じで、世界的規模では食料飢饉が確実視されている中で、穀物自給率四〇%がさらに下げられようとしています。「虎御前」の思い出からとんでもない方向となりましたが、わが国固有の衣料文化も食文化も、これ以上の荒廃を防ぐことが二十一世紀に向けて必要なことではないでしょうか。愛すべき次世代を担う人たちにとって悲しい将来にならないように。

近況雑感

第48回卒（昭和32年）
福井市　清水芳雄

「ヨシ坊も年か・・・・」本年八月、北アルプス・岩苔乗越から高天原への途上での独り言。とても人様に見せられる姿ではあるまい。

「長期山行も今年が最後」と、我が山行ルートから取り残された、『黒部五郎岳、水晶岳、赤牛岳』を巡る計画の下、精一杯の準備で折立から入山した。「毎年そんなことを言って・・・何回聞いたことやら。」と苦言を呈しながらも、暖かく送り出してくれる家族。『悪いな』と思いつつ、ここ何年も我儘を通してしまっている。

今夏は特別に天候不順であったが、『そんな中で天の神様がお情けを下さった』。重い荷物と孤独の中で、『あの世の父母が我儘なヨシ坊のために、頭を地に付けて神様に嘆願してくれている』としか考えられなかった。自然と、田や山を駆け巡った、野木での幼少時代が走馬燈のように浮んできた。『それにしても、年をとったもんだな・・・』

齢五十を越え、「功無きを恥ず」で、金銭的には不思議なくらい縁がないものの、今日までそれなりに恵まれ、感謝の一念。

将来の夢

野木小学校六年生

○私は、歌が好きなのでアイドル歌手になりたいです。
居関　あゆみ

○ぼくは、巨人の松井選手みたいにたくさんホームランが打てるプロ野球選手になりたいです。
上野　恭輔

○小さい子が好きなので、保育所の先生になりたいです。
大橋　杏実

○ぼくは将来プロ野球に入りたいです。
奥本　敏博

○私は将来漫画家になって、自分の漫画が日本全国にとどくようにしたいです。
奥本　麻衣

○ぼくは、プロ野球のドラフトで一位指名され、大かつやくします。
奥本　昌稔

○苦しんでいる人たちを助ける、やさしい看護婦になりたいです。
小野　舞優

○大金持ちになって、もっと大金持ちになるためにがんばる。
倉谷　謙太朗

末っ子で育ったヨシ坊は、終戦の大変な時代ではあったものの、自然に恵まれ、額に汗する親達の後ろ姿をみ、心暖かい環境で、存分に飛んでまわることができた。大学へ進学しても、「しっかり食事せよ。その分は仕送りする。」の父の言葉。地元の銀行に就職して、だれよりも励ましてくれた父。初任給からの心ばかりの小遣いを、死ぬまで箪笥の中にしまい込んでいた母。早すぎる結婚を許し纏めてくれた父。銀行のオンライン開発で徹夜の連続。安月給・安アパートで我慢してくれた最愛の妻。おやつを我慢してくれた子供達。ディーリング業務で大変な経験。痛風や網膜剥離に見舞われ、妻・子供達に心配を掛けたこと。子供達が皆大学へ進学したこと。長女が結婚したこと。営業店長経験後、現在は移動通信網業界の仕事（出向）に。

この年になっても、未だに『山』が忘れられない。もう限界だとは思うが、「今のうちに行けるところへは」の気持ち。しかし、元気な野木育ちのヨシ坊も、『赤牛岳』だけは踏むことはできなかった。

私を育んだもの

第53回卒（昭和37年）
大飯町　荒木　久美子

日々の多忙な暮らしの中で、もう殆んど忘れてしまっていた小学生の頃の自分を、原稿依頼をいただいた事で少しずつ思い出しています。

お宮さんに集まっての集団登校は楽しいことでした。石けり、陣とり、ゴム飛び。皆んな夢中で集団で遅刻したことがありました。学校の休み時間は、体育館のよい場所を取るために走りました。お手玉、おはじきが流行っていたのです。ゴムマリ遊びも楽しい思い出です。「一丁目の一助さん一の字が大好きで…。」の歌にのせてボールを足の間にくぐらせて、スカートの中にポンと入れるのです。そのためにフリルが多目のスカートが欲しくて母に作ってもらいました。校庭にはシロツメクサが一杯咲いていて冠や首飾りをいくつも作りました。帰り道では、友達のウソか本当か分からない話に夢中で聞き入ったり、流行歌を教えてもらったり、ジャンケン遊びをしながら数歩ずつ進んだり、家に着く頃には薄暗くなっている事もありました。日曜日のままごとも楽しい思い出です。むしろを敷いて葉っぱのお皿にごちそうをのせます。大きな葉っぱで芯に花の赤や黄を入れて、のり巻きも作りました。おばあちゃん手作りの人形も仲間でした。夏は北川で水遊び。見よう見まねで犬かきを覚え、初めて向こう岸へたどり着けた時は、やっと皆の仲間入りができたと大感激でした。帰りの草道で草が結んであったりして転んだり、よし仕返しだと一杯結んで男子が転ぶのを楽しんだり。次々と楽しい思い出が浮かびます。

その間、誰に叱られた事もなく、怒られる事なく、平和に温かくふる里の皆さんに見守られ過ごさせていただいていたんだなぁと今つくづくと感じています。ゆっくりとした自然の移ろいの中で今の私が作られていったんだと思い

○ぼくの夢は楽しいゲームを作製することです。
倉谷貴行

○ぼくは、有名なレーサーになりたい。
桑原　弘

○ぼくは、おもしろいタレントになりたいです。
清水洋志

○私は将来、みんなに好かれる保母さんになりたいです。
清水美緒

○ぼくは将来、プロ野球選手になって王貞治のようにホームランを打ちたい。
田中正太

○ぼくは将来、プロ野球の横浜ベイスターズに入り、かつやくしたいです。
田中伸治

○ペットショップの店長になって、動物の世話をしたい。
西　理江

○ぼくの将来の夢は、ポケモンやドラクエに負けないゲームをつくることです。
宮川拓也

○ぼくはとても人気のある有名人になりたい。
山田裕太

ます。光が好き。風が好き。雨が好き。木が花が草が好き。田んぼが好き。畑が好き。年老いた方が好き。子供が好き。人間が好き。そして私自身。命ある事に感謝しつつ、私なりの精一杯の生き方をして行きたいと思っています。自然の流れに逆わないでゆっくりとゆったりと。それが私だからそれでいいのです。あの頃から今も本質は変わっていないのです。野木っ子のまんまの私です。

新校舎と野木の里

第64回卒（昭和48年）
鯖江市　西川　真理子

今の校舎ができたのは、小学校三年生の時でした。学年ごとに並んで渡り初めをしました。ベランダ付の広い教室、きれいな廊下にびっくりしました。給食を運ぶエレベーターもあり、ストーブに変わって、全館暖房の設備になりました。授業中に顔だけが赤く熱くなりました。体育館は旧校舎のままでしたので、冬は体育館への渡り廊下へ出たとたん、急に寒く、本館との温度差をとても大きく感じました。卒業してから現在までにプールやランチルーム、グランドなど次々と整備された様子で、りっぱになったなあと思います。

今もあるのかどうかは知りませんが、四年生になると、鼓笛がありました。楽器の持ち方や演奏のし方は、六年生の先輩に教えてもらいました。君が代マーチ、太平洋行進曲、そして校歌がなつかしく思い出されます。会員の皆様は校歌を覚えていらっしゃいますか。小学生の時は、ただ覚えるものと思い、意味も考えずに歌っていました。その歌詞を今思い出してみると、情景がよくわかります。私の小学校時代は、校歌に歌われているように、歌って、踊って、学んで楽しい野木の里であったと思っています。野木へもどれば、ほっとし、いやなことも忘れ、そして明日へのエネルギーとなって毎日の生活を送っている今日です。

新成人からの便り

思い出

第82回卒（平成3年）
杉山　竹村　鈴子

私は、今年の五月に、野木小学校で教育実習をさせていただきました。学校はほとんど変わっていませんでした。ただ少し違って見えたのは、私自身が変わっていたからなのだと思います。未来から訪れた私は、実習中ずっと、小学校時代のことを懐かしく思い出していました。立ち場が代わると、私が小学生の時、先生方がどんなに自分たちのことを思ってくれていたか、よく分かりました。珍しい物がたくさん置いてあって、どきどきしておもしろかった遊び場も、今見たら小学生には危険すぎて、遊ばせたくない場所になっていました。私が小学生の時にも、そこは先生に「遊んではいけない」と言われていた場所でした。その時の先生方の気持ちが分かって、少し反省しました。大人になってそれだけ多くの情報を身につけ、もしもこうなったら、…と考えることが増えたのだと思います。冒険心のなくなったことに少し寂しくもなりました。

私が卒業した時と、校舎はほとんど変わっていませんでしたが、入学した時とは変わっていました。私が六年生のときに特別教室の移転があったのです。図書室が資料室に、音楽室が図書室に、図工室が音楽室に、そして旧図工室が図工室に変えられました。当時は違和感があったのですが、今ではすっかり馴染んでいて、寂しいようなやしいような気持ちになりました。そのときの机や椅子、備品などの移動を、私たち六年生だけが手伝わされたことを覚えています。私たちは、その時にしては人数の多い、二十六人の学級だったので、先生方はちょうど良いと喜んでいましたが、私たちにとっては重くてつらいだけで、その時はなんて運が悪いんだろうと思っていました。けれど今となっては、一番人数の多い一番年上の私たちが、みんなで力を合わせて学校中の人の為に働いたのだ、というような、ちょっと自慢の思い出です。

野木小学校を卒業してから、私の友達は、中学校、高校と進学するにつれて増え、交友関係の範囲も、野木、上中、若狭と広がってきました。その広がりによって、多くの友達からさまざまなことを吸収し、成長することができました。いろんな友達と接することはとても楽しいですが、時々野木小学校の同級生が恋しくなることがあります。小さな頃からの友達というのは、掛替えのないものだと思います。今私は、他県で一人暮しをしているのですが、その大切さを改めて感じています。何も言わなくても、自分のことを小さい時から知っていてくれる友達が野木小の同級生です。自分を説明することが苦手な私にとって、一番安心できる大切な、忘れることのない友達です。

今の自分

第82回卒（平成3年）

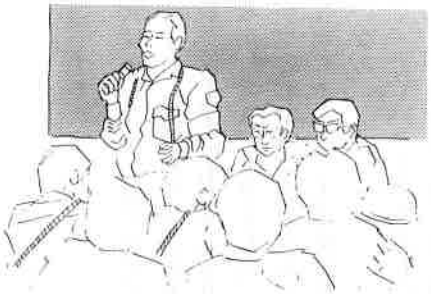
K・M

私は二年前若狭高校を卒業し、今は大阪の専門学校の二年生です。専門学校では建築の事を学んでいます。今まで建築というものを学んだ事はなく、一からのスタートだったので、理解するのにとても苦労しました。しかし、工業高校出の友達が教えてくれるのでとても助かります。私も大阪に出て一年半ぐらい過ぎましたが、県外の友達がたくさんできました。やはり、一度は県外へ出てみてよかったと思います。

私が大阪へ出たのは都会へ行きたかったという事もありますが、一人で生活したかったからです。やはり一人暮らしは、家ではしなくてもよかったことも全て自分でしなくてはいけないので、いろんな勉強になります。料理もできるようになり、だいたいのことは出来るようになりました。それと同時に、今まで私の分までいろいろとしてくれていた家族の苦労がとてもよく分かりました。自分一人分の食事を作るのも大変なのに、母は毎日五人分の食事を作っていました。その苦労を考えるととてもありがたく感じます。一人暮らしをすると、今まであたり前のようにしてもらっていた事のありがたみがよく分かります。

私は夏の休みと冬の休みには家へ帰ります。一人暮らしをしていて家へ帰ると、とても楽だと感じます。そして、とても居ごこちがよく感じます。それは私が帰ってきた時ぐらいゆっくりさせてあげようという家族の思いやりもあると思いますが、やはり違った感じがします。私は、この帰ってきて家族と会いとてもなつかしいという感じがとても好きです。

私は今年学校を卒業し、就職します。家は建築関係の仕事をしていますが、そのまま家に入らずに、大阪で働こうと思っています。その理由は、すぐに父の下で働くと甘えが出てしまうことと、自分で就職活動をし就職先を見つけることも自分のためになると思ったからです。そして、父に迷惑をかけないようになるまで、大阪で仕事を覚えたいと思います。家族は、私にすぐに家に戻ってきてほしいと思っていると思います。しかし、私が一人前になるまでもう少しの間、私のわがままをきいてもらいたいと思います。家族と離れて暮らしている今、家族への感謝の気持ちを深く感じます。



家庭の日入賞児童作文

金賞

ゆき子の自てん車れん習

三年　森おか　さき子

「ゆき子っ、れん習始めるでえ。」

と、わたしが言うと、

「はあい。」

といういい返事をしたゆき子ですが、まだ何かゴソゴソやっています。

「いくでえ。」

と先に行きかけるとすぐとんできます。

年長になったゆき子は、今年の夏、ほじょ車なしで自てん車にのるれん習をすることになりました。

れん習場所はしゅう落センターに近いさか道です。そこはとても広くてれん習しやすい所です。わたしもここでのるれん習をしたものです。

はじめはわたしがハンドルをもってときどきはなしました。するときまってゆき子はわたしの方にたおれてきます。

今度はペダルから足をはなしてやると、少しのれました。一メートルぐらいだったけど、その時は、

「やったあ。」

「のれたあ。」

と大はしゃぎでした。

お父さんがいる時は、毎日れん習しました。お父さんが一しょだと、ゆき子はなんだかとてもはりきっているように思えました。

わたしは、もっといけるといいなと思いました。

家に帰るとじいちゃんもばあちゃんもお母さんも、

「どうやった。」

と聞きます。家ぞくみんながゆき子をおうえんしています。

れん習をし始めてから十日ぐらいたって、ペダルに足を

のせて走れるようになりました。

「よし、いけたぞ。」

お父さんは手をたたき、とび上がってよろこびました。わたしもとてもうれしかったです。お母さんも見にきて大よろこびでした。

ところがある日、びっくりすることがおこりました。ゆき子がカーブをまがりきれなくて、田んぼに落ちたのです。わたしが急いでそこに行くとないているゆき子の手をひいて上がってくるお父さんの下に自てん車がころがっていました。わたしが、

「だいじょうぶか。」

と聞くとゆき子はべそべそとないていました。

「れん習の時は、一回か二回ぐらいしっぱいすることがあるからあきらめんときなよ。」

と言いました。ゆき子はないていたけど、下が草だったので、けがをしなくてよかったです。

そんなことがあったゆき子だけど、またもとのように、れん習をつづけました。わたしはそんなゆき子がとてもえらいなあと思いました。

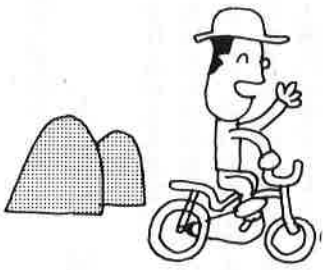
そして、ついに家ぞくじゅうがまっていた日がきました。ある日の夕方、いつものようにれん習していると何回目かに、ゆき子がカーブをまがり、どんどんどんどんとこいでいって、三百メートルぐらいも進むことができたのです。わたしたちはとび上がってよろこびました。

帰ってからお母さんとじいちゃんとばあちゃんにそのことをいったら

「よかったなあ。」

とよろこびました。その日のばんごはんのときにみんなでかんぱいをしました。

ゆき子が自てん車にのれるようになったら家ぞくみんなでサイクリングに行くという、お父さんのゆめがもうすぐかなえられそうです。



金賞

仏様になった大ばあちゃん

五年　辻本有未

大ばあちゃん、見ていてくれますか。私は五年生になり、身長も体重も大ばあちゃんより、はるかに大きくなりました。私が生まれた時、お母さんに

「有未ちゃんの二十才を見たいなあ。」

って、よくいっていたらしいのに、平成九年十月二日、朝六時、静かに静かに息をひきとった大ばあちゃん。九十才でしたね。あれから十ヵ月。わが家は、いつものようにお盆を迎え、初めて仏様として大ばあちゃんを迎えました。私達大きくなったでしょう。

「やさしい人だったよ。」

「ずい分、力になってもらったよ。」

お母さんから、そういつも聞いているよ、大ばあちゃん。四才の弟・晃士が、

「大ばあちゃんは天使になったんや。背中に羽をつけて天国に行ったんや。」

って、言ってたよ。お盆のお墓参りの時、小さな手で何回も何回もお水をかけていたよ。

私は、今まで何もしてあげられなかったから、心残りはあるけれど、でも大ばあちゃん。私は、大ばあちゃんの事が、とっても好きだったんだよ。パンパースをするようになってからも、

「きらわなくて良かった。」

って、心の中から、そう思っているよ。家の中に、病気の人やねたきりのお年よりがいると、想像をはるかにこえるくらい大変な事も、だからこそ知る事のできた家族のきずなも、大ばあちゃんがいたからこそ勉強できたんだと感しゃしているよ。

八月二日は初盆で、大勢の人がお参りに集まってくれましたね。よその人が集まってくると、

「ね間におるのはイヤや。みんなといっしょに食事をしたい。」

と、中風で不自由な口のかわりに手で合図していた大ばあちゃん。にぎやかな夕食でよかったね。手先がとても器用で、みんなにやさしくしてくれた大ばあちゃん。お墓に九文字の名前が書かれていましたね。ほうじょうさんに名前をつけてもらって、行ってしまったのですね。人の命があっけない事も、生きる事の大切さも、大ばあちゃんをなくしてから、気がつきました。お母さんが言うんです。

「有未が、あみ物や手芸が好きなのは、大ばあちゃんにたんやなあ。」

じゃあ大ばあちゃん。いなくなっても、私の心の中にいてくれるんですね。

私は、大ばあちゃんに教えてもらった事を忘れずに、いつでも何でも一生けん命、がんばれる人になりたいと思います。そして他人にやさしくできる大ばあちゃんのような人になりたいと思います。そして、二十才になった私を見るのを楽しみにしていた大ばあちゃんをガッカリさせないように、力一杯、努力して生活したいと思います。

だから、大ばあちゃん。高い所から、しっかり見ていて下さいね。

銀賞

お母さん

二年　辻本昇子

わたしのかぞくは、お父さんとお母さんとおねえちゃんとわたしとおとうととおばあちゃんの、六人かぞくです。お父さんもお母さんも会社に行っているのでわたしは、よるに、おはなしをぜんぶ聞いてもらいます。お母さんの顔を見ると、わたしは、かならず

「今日のごはんは何？」

って聞きます。そして、今日はだれとあそんで、何をべんきょうして、学校ではこんなことがあって、つぎからつぎへと休まずにしゃべります。

「昇子ちゃんは、口から生まれたなぁ。ぜんぶ聞くから、ゆっくりおはなしして。」

って、いつも、お母さんはわらいながら言います。でも、あかん。おねえちゃんも、あきひともしゃべるから、ゆっくりしてたら、あとまわしになってしまう。だから、いつも、大いそぎでしゃべります。

「ちょっと、おちつきな。男の子みたいやで昇子ちゃん」

って、いつも言うねお母さん。だから、

「ハッハッハッ」

って、いつもわらうよわたし。

「昇子は、明るくて、すきやで。」

って、ふとんの中でお母さんが言ってくれました。とってもうれしくて、心ぞうがドキドキして、なかなかねられませんでした。

「昇子、お母さんのおなかの中で何しとった？」

って、お母さんが言いました。

「あそんどったよ。ごはんもたべたし、おやつもたべとった。」

「昇子は、あわてんぼうで二週間も早く生まれたから、チンチンわすれてきたなあ。本まは男の子やったんかもしれんわ。」

そう言って、お母さんが、だっこしてくれました。おなかとおなかをくっつけて、

「すき。すき。すきー。」

って、二人で大きなこえで言いました。そして、大きなこえで、わらいました。とってもきもちよかったです。

このごろ、お母さんつかれているのかな？よく、

「昇子ちゃん、たのむし足ふんで。」

って言います。お母さんが、

「きもちいいわ。らくになったわ。」

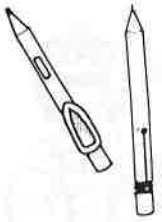
って言ってくれるのが、うれしくって、ねむたくてイヤなときも、いつも、ふんであげます。

ずっとずっと、元気でやさしいお母さんがいいです。

銀賞

せいざ

三年　河原健太



ぼくの家では夏休みの間、夜に十分間せいざをすることになりました。やるのは、ぼくと、たっちゃんと、兄ちゃん、それにじいちゃんです。せいざをすることになったのは、

「せいしんをとういつして、今日一日の反せいをしよう。」

と、じいちゃんが言い出したからです。人にめいわくをかけなかったか、何か一つでもよいことをしたかをふり返ります。

一日目、ぼくはぜんぜんしゅう中できませんでした。たっちゃんも目を開けて、ゴソゴソしていました。兄ちゃんは、ぜんぜん動かず、きっちりとしています。さすが兄ちゃんです。二日目、三日目になっても、ぼくとたっちゃんは、まだきっちりできなくて、じいちゃんに注意されました。でも、なかなか聞けませんでした。四、五日ぐらいには、ぼくたちも少しずつ落ち着いてきました。

一週間もしたら、だんだん上手になってきて、しゃべらないようになりました。ぼくも兄ちゃんと同じように目をとじて、きっちりとすわっていられるようになりました。さすがのじいちゃんも、ほめてくれるようになりました。でも、何分たったのか気になって、チラチラと時計を見てしまいます。キャッチボールをしたり、ゲームで遊んだりする時は、十分ぐらいは、あっという間だけど、せいざをしてじっとしていると、とても長く感じます。

今では、せいざを始めてから二十日ぐらいがすぎました。やり始めたころは、じいちゃんから、

「やろうか。」

と、声がかかるまで、やる気が出ませんでしたが、今は、せいざをしないと一日のおわ

りが来ないようで、何かすっきりしません。だから、自分たちからやり始めます。

きのうのせいざの時に反せいしたことは、人にめいわくをかけるようなことは、しなかったかな。午後から弘君が家に来て、本を読んだり、テレビで高校野きゅうを見たりして遊んだな。夕方には、暑さでしおれかかっていた花や木に、水をやったな。ぼくたちがのどがかわいた時、つめたい水を飲んでとってもおいしいと感じるみたいに、花や木もよろこんでいるようだったな。そして、元気になったようだったな。ということでした。

せいざは、十分間という短い時間だけど、一日をふり返るのに大切な時間です。せいざをしてしゅう中力をつけると、スポーツや勉強も、ちょっとは上たつすると思います。これから先も、進んでやりたいです。

夏休みがおわるころには、もっともっと上手にできるように、今日もがんばってやります。

いねかり

一年　たかぎりな

わたしのうちは、おこめをつくっています。はるに、たうえをして、なつやすみのおわりには、なえもそだっていねかりができます。わたしは、なつやすみに、かぞくみんなでいねかりにいきました。

おとうさんは、しゃこからこんばいんをだしてきてたんぼまでもっていき、おかあさんは、けいとらっくをうんてんしてわたしは、おかあさんのよこにのり、おにいちゃんは、じてんしゃで、おばあちゃんは、いちりんしゃをひいて、たんぼまでいきました。おとうさんのこんばいんがつくとすぐたんぼへはいっていねをかりはじめました。わたしは、てぶくろをはめておてつだいのじゅんびをしていると、

「りな、ちょっときて。」

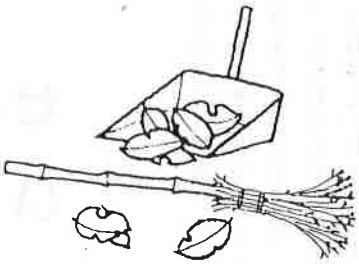
とおかあさんによばれました。わたしは、なにをするのかなあとおもったらこめをいれるふくろをけいとらっくからおろしました。そして、おとうさんのかりとったいねをおかあさんとふたりでけいとらっくにのせようとしたけどおもくてのせられないのでおにいちゃんにてつだってもらうとできました。

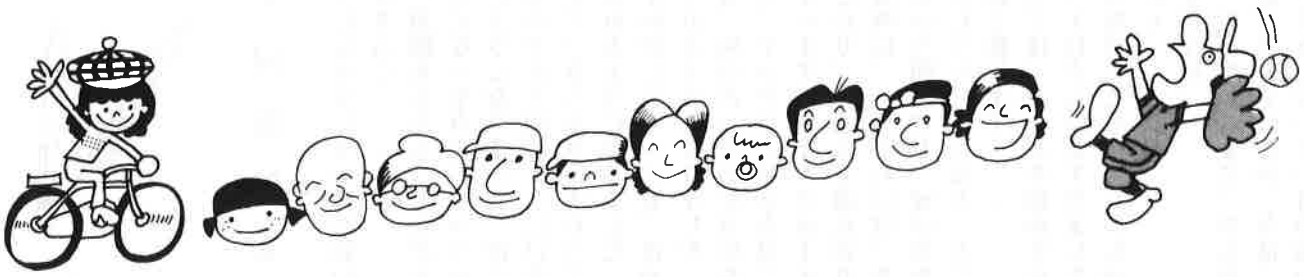
おばあちゃんは、こんばいんでかれないいねのすみをかまでかっています。おとうさんの、こんばいんは、たんぼのなかをぐるぐるまわって、どんどんいねもかりとれます。けいとらっくがいっぱいになってきたので、おかあさんと、おにいちゃんとわたしでこめをだしにかんとりいまでいきました。ぜんぶで三かいいきました。

とてもあついひだったけどみんなでするとはやくおわりました。かんとりいへだしたいねは、かこうされて、しんまいができていきます。わたしたちがそれをたべるのは、十がつぐらいですがとてもたのしみです。わたしの、てつだったいねはおいしいおこめになっているかな。

むかしは、きかいがなくて、かまでぜんぶかりとっていたそうです。そしてかりとったいねをうちで、かこうしていました。いまはなんでもきかいがあるけどおばあちゃんのわかいころは、あまりなくてたいへんだったとおもいます。わたしは、すこしでもおばあちゃんたちのおてつだいをこれからもしたいとおもいます。

いねかりは、とてもたのしかったです。





銅賞

なつのしごと

一年　にったみほ

うちではなつになるとおとうさんとおじいちゃんが、かきねやうえきののびたえだをきります。

ことしも七がつにはいると、おとうさんはやすみのたびにそとでチョキチョキきっていました。おじいちゃんもすこしずつがんばってチョキチョキきっていました。

うちには、かきねやうえきがたくさんあって、ふたりでやってもなかなかすすみません。でも、おぼんまえのにちようびには、それもすっかりすみました。

つぎのひ、わたしはおにいちゃんとおかあさんとで、きったはっぱのかたづけをしました。はじめにおかあさんがたけぼうきで、ちらばったはっぱをあつめました。それをおにいちゃんとわたしでみどりのおおきなふくろにいれました。さいごにおにいちゃんがそのおおきなふくろをいちりんしゃにつんでのうどうにはこんで、ぜんぶがおわりました。おかあさんは、

「さんにんでやるとはやいなあ、ありがとう。」

といいました。

かぞくのみんながちからをあわせて、なつのしごとがおわりました。いえのまわりがぜんぶさんぱつしたてのようにすっきりして、とってもきもちよかったです。

銅賞

「妹」

四年　竹原　翔

ぼくの妹の名前は優です。おととしの一月十四日に生まれました。ぼくが生まれた日の一月二十七日とよくにています。

優は、二才になりました。今は、よくしゃべったり一人でご飯が食べられたりします。でも、一人でトイレへは行けません。おしっこをしたい時はトイレへ行くけれど、うんこの時は、ぜったいトイレへ行かず、部屋のすみでう～んとふんばります。

好きな色は黄色で、好きなもようはしましまです。しましまの服を着ていると、

「あっ、しましま。」

と、見知らぬ人にでも大声でさけびます。また、歌がとっても好きで、気がつくといつも歌を歌っています。そしてすごいなと思うほど、たくさんの歌を知っています。歌のお姉さんになるのかな？。と思います。

妹でこまることは、どんな時でもぼくといっしょのことをしたがります。ぼくが勉強をしていると、

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。」

とうるさく言って、いすに上がって来ます。ぼくがドーナツを食べていると、

「ゆうちゃんもほしい。」

とほしがります。それで、どこかでかくれて食べなければいけません。急いで全部口の中に入れて、かみながら妹の所へ行くと、妹は、

「口、開けてみ。」

と聞きます。そうするとぼくは、

「何もないで。」

と言って、急いでかんで飲みこみます。おやつもゆっくり食べられません。ぼくは、

「こんなこと聞かなくてもいいのにな。」

と思います。

食事の時、ぼくがお茶を飲むと、妹もお茶を飲みます。ご飯にふりかけをかけると、妹もかけます。

ぼくは、妹がまねが好きなのかなと思います。

それから、妹は、言いたいことははっきりと言います。じっと見ているテレビをちがうチャンネルに変えると、妹は、

「いや。」

と言います。また、ぼくが持っているものは、全部妹の物です。ちょっとさわった物、きれいな物があると、

「これゆうちゃんの。」

と言って、自分の物になるまで泣いています。

こんな妹だけどぼくが鼻血を出した時やかぜひいた時は、

「大丈夫か？。」

と、言ってくれます。また、妹がおやつを食べている時、

「お兄ちゃんも食べな。」

と、自分のおやつを半分分けてくれます。

いつも、にくたらしい妹だけど、本当はかわいいです。

これからも、妹と仲良くしていきたいです。

銅賞

お弁当作り

五年　福住　まどか

お母さんが、八月二十四日と二十五日に、旅行に行きました。そして、二十五日は、お兄ちゃんの卓球の試合がありました。お母さんがいないから、私とお父さんでお弁当を作ることになりました。お兄ちゃんは、六時までに行かなければいけないので、五時に起きるため、早くねました。ねる前は、五時に起きられるか心配でした。

朝五時。私は、ねむたくてゆっくり起き上がって、台所へ行きました。すると、お父さんは、もう起きていて、たまご焼きを作っていました。

「お父さん、早いなあ。」

と私が言うと、お父さんは、

「四時ごろ、目が覚めたんや。」

と言いました。私は、びっくりしました。

そして、私もやり始めました。まず、たまご焼きを切って、お弁当箱にもりつけました。たまご焼きは、焼きたてで、ほかほかしていました。

「どこに置けばいい。」

と聞くと、

「もりつけは、まかせるわ。」

と、お父さんが言いました。

次に、シュウマイを電子レンジであたためました。その間に、ご飯を入れました。とても熱くて、やけどしそうになりました。

そして、いろいろなおかずを、アルミケースに入れて、もりつけました。だんだん私も食べたくなってきました。だって、お兄ちゃんは、部活とかでよくお弁当を持っていって食べられるけど、私は、遠足とかの時しか食べていないから、食べたくなってきたのです。

そしたら、お兄ちゃんが起きてきて、準備を始めました。時間がなくなってきたので、急いでやりました。

最後に、うめぼしを入れました。なんでうめぼしを入れるのかなあと思って、私が、

「なんで、うめぼしいれるの。」

と聞いたら、お父さんが、

「暑い所に、置いとくと、くさりやすいけど、うめぼしを入れとくと、くさりにくくなるからや。」

と言いました。私は、知らなかったので、

「そうなんやあ。」

と言いながら、うめぼしを入れました。

そして、完成しました。お母さんが作るのとは、全然ちがうけど、うまくできました。

お兄ちゃんの、出かける時間にまに合ったので、ほっとしました。

夕方、お兄ちゃんが帰ってきたので、

「どうやった。」

と聞いたら、

「ダブルスは準決勝までいった。」

と言いました。

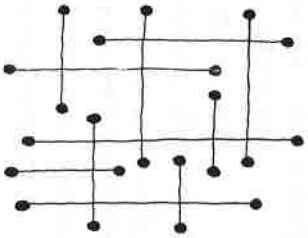
「お弁当は、どうやった。」

と言ったら、

「おいしかった。けど、シュウマイがかたかった。」

と言いました。

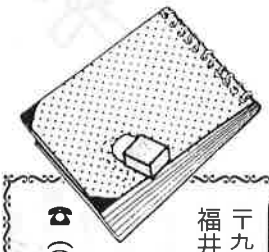
今日は、お父さんと私でお弁当を作ったけれど、お母さんは毎日お弁当を作らなければいけないので、大変だなあと思いました。無理して早く起きたけれど、私には毎日早く起きれないと思いました。でも、お弁当作りはとても楽しかったので、お母さんが用事でいない時、お父さんとまた作ってみたいです。



編集後記

同窓会報十二号をお届けします。今年も皆様のご協力により会報をお届けできますことを編集委員一同の喜びとするところです。

寄稿のお願いを致しましたところ、ご多用の中快くお引き受け頂きました皆様、本当にありがとうございました。故郷への思い、同窓生への思い、親や家族への感謝など、皆様の人生を想いながら拝読させて頂きました。ありがとうございました。



事務局から

住所を変更された方や改姓された方はお知らせください。

連絡先
〒九一九―一五五五
福井県遠敷郡上中町武生
十四―五
野木小学校
☎(〇七七〇)五七―一三〇〇